

診療放射線技師の明日への想い ～ JJ将来構想会議答申案固まる～

佐野 幹夫

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



近頃、日本の隣国の動向に世界中が困惑している。国際社会からの再三の警告を無視して、日本上空を通過する弾道ミサイルを発射させるとともに水爆実験を行うなど、挑発行為を繰り返す北朝鮮に国連安保理は制裁と圧力の追加決議をした。最後の最後まで望みを捨てず、平和的解決を望みたいものである。国も組織も人間によって形成（集合体）されている。人間関係は互いを尊重し理解することで修復は不可能ではないはずだが、厄介なことに人間とはいかに冷静を装っても過去の記憶と感情に左右される生き物である。

ところで最近、ある会議の答申案がまとめられた。それはJART-JSRT将来構想会議からの答申案である。この会議は、日本診療放射線技師会（JART）と日本放射線技術学会（JSRT）の年別代表を双方の団体から委員として各5人を選出し、JSRTの船橋副代表を議長に、本会からは熊代副会長を副議長に、約2年の歳月をかけ進められてきた。双方の団体の活動目的と存在意義について「将来構想」をテーマに議論を重ねてきた成果である。双方の団体がこの答申の内容を十分に検討し、実現に向けた具体的な施策が打ち出せるかが今後重要であり、将来構想に向け双方の団体に課せられることは、会員への理解と協力を仰ぐ丁寧な説明である。

会員の多くはすでに理解していることではあるが、ここで改めて双方の役割について述べたいと思う。本会は、診療放射線学を基本とした診療放射線技師の資格を守り、社会的な地位と専門職業務の発展に資する職能団体である。また日本放射線技術学会は、放射線技術学を追求する放射線関連最大の学術団体である。しかしながら、学術および教育的側面を中心に両会の活動が重複している領域も少なからず存在しており、両会の活動内容をはっきり区別することが難しいこともまた実情である。そのような中で2014年2月、日本放射線技術学会（JSRT）の将来構想特別委員会より「多様化する社会の要請に応じて」と題した答申が提出された。この答申において「日本診療放射線技師会との相違の明確化と協力体制」に関する提案を契機に、日本放射線技術学会から本会への正式な要請を受けて「JJ将来構想会議」の発足に至ったのである。

今回の答申は、日本の放射線医療の実践者である両会が、双方の活動目的・存在意義を明確化し、将来に向けた協力体制の構築を目指すものであり、両会の活動の方向性を再確認するとともに協働し課題とすべき事項を抽出することで、双方が抱えている問題構造の共通認識を持つことにつながる。そして両会がお互いを正確に理解し将来を見据え協力体制を整えば、双方が発展するための「礎」となる協働作業と位置付けている。JJ将来構想会議で今回検討された事項は「社会的貢献の在り方」「地方での活動の在り方」「国際化と国際戦略の在り方」「養成校教育の在り方」「大学院教育と六年制教育への移行」「卒後教育」「専門技師制度」「学術研究活動の内容とその対応」「学術大会」「読影の補助」「情報共有の在り方」「両会の一部機能の統合について」など、実に12項目にも及ぶ議論がなされてきた。内容の詳細については、近い時期に会員の皆さまに提示されるはずである。

JJ将来構想会議のメンバーに感謝を申し上げるとともに、必ずや今回の答申案協働作成は、将来を見据えた診療放射線技師の新たな1ページになることであろう。そしてJJ将来構想会議答申案の最後のまとめの言葉として「本会議で討議した多くの事案とそこから生まれた提案が、確実に両会の次の時代への布石となると確信している。そして両会がそのアイデンティティーを維持した中で、いくつかの機能を統合することは、日本の放射線医療にとっての重要な一歩であり、両会が共に歩む未来が国民ひいては人類に大きな貢献をもたらすものであることを願いこの答申を結ぶ」と締めくくられていた。

当然ではあるが両会は職能団体（技師100%）と学術団体（技師90%以上）と全く形態の違う団体ではあるが、両会ともほとんどが診療放射線技師で構成されている。そして両会が65年の歳月を経て今、将来に向けた建設的な議論をする環境が、少しではあるが整いつつある。まだまだ今後も双方共に幾多の越えなければならない問題はあるが、今回の答申案作成に関わる協働作業は、明るい未来を目指す確実な一歩となろう。大いに期待するところである。そして、この先未来永劫に現業務が保証されていると誰が言えようか？今こそ全ての診療放射線技師が危機感を持ち共通認識をするべきである。